

新出墓誌から見る入唐西域人の活動

——哥邏祿熾俟氏家族を中心として

栄 新江
(田 衛衛 訳)

本稿で取り上げる主な史料は、西安で新たに発見された二件の哥邏祿（カルルク、Qarluq）首領の墓誌である。一つは、唐開元二十四年（736年）の「熾俟弘福墓誌銘」であり、もう一つは、唐天宝十三年（754年）の「熾俟迪墓誌銘」である。この二人の墓主は親子関係である。この二つの墓誌に基づき、これらの哥邏祿人が長安に入居した後の、西北のもともとの部落との繋がりや、沙陀やソグト胡人との婚姻関係、そして坊里周辺の居住環境、唐の官府による管理などの問題を考え、入唐した西域胡人の状況を検討する。

この二つの墓誌の釈文は下の通りである。

「熾俟弘福墓誌銘」（開元廿四年）：⁽¹⁾

大唐故雲麾將軍左威衛將軍上柱國天兵行軍副大使兼招慰三姓葛邏祿使熾俟府君墓誌銘并序

朝散郎行長安縣尉裴士淹撰 吳郡陸菀書

公諱弘福、字延慶、陰山人也、其先夏回氏之苗裔。粵若垂象著明、天有髭頭之分；封疆等列、地開剪髮之鄉；襲廣大回居尊、務遷移以成俗；和親通使、冒頓於是興邦；保塞入朝、呼韓以之定國；則有大恩貴種、當戶都尉、必及世官、作為君長。其或處者、我稱盛門、曾祖娑訶頡利發、大漠州都督、鎮沙朔而用武、保公忠而竭誠。祖步失、右驍衛大將軍兼大漠州都督、天山郡開國公、統林胡而莫犯、司禁旅而踰肅、交力、本郡太守、紹前烈而有光、翼後坤而可大。公幼而聰敏、長而豪傑、於孝友則天資、以功勛為己任、常謂先人大業、克清邊塞之塵；壯士長懷、願赴邦家之難；忽焉投筆、即事戎獵旌。屬十姓背恩、三軍是討、雜類多詐、潛圖暗襲；公察其目動、識其言丑、馳輕騎而來犇、戒王師而設備、為覆以待、夾攻於衷、因執馘以獻俘、迺議功而行賞、超等特授遊擊將軍。朝廷復念茲良圖、未足允答、明年拜桃林府長上果毅都尉、又除左驍衛郎將、既輟歸牛之地、仍加冠鶡之榮。萬歲登封元年、進雲麾將軍、左威衛將軍・上柱國、忠謹日彰、助庸歲積。詔充天兵行軍副大使兼招慰三姓葛邏祿使、於是臨之以敬、董之以威、土馬之富如雲、戈鋌之明似雪。時突騎施懷貳、烏質勒不誠、公秘探其旨、且獻其狀、餘孽朋扇、熒惑上聞；以斯剛毅之心、不免饒邪之口、遂貶蘄州蘄川府折衝、仍為黎州和集鎮副。東海之冤未查、南溟之羽已催、天實為之、命可長也。神龍二年十二月廿九日行路構疾、終於劍州劍門縣之逆旅、春秋五十有三。嗚呼哀哉！公雄材邁俗、宏

略冠時；獻馬以助軍、執兵以報國；伊秩訾之入侍、佩印稱榮；金日磾之登朝、封侯藉寵；靜言於此、千載同風。夫人沙陁氏、封燕郡夫人、從夫之貴也、塞淵其德、淑慎其儀、即以開元廿四年五月十七日祔葬於長安高陽原、禮也。嗣子[圖]、左驍衛中郎將；次子璟、寧遠將軍守右領軍衛翊府右郎將・上柱國、賞紫金魚帶；次子溫、長樂縣開國男；次子璉、右威衛果毅都尉、借緋魚袋；次子震、明威府別將等。高名出群、至性加等、謫墨客之幽思、揚先君之耿光。其詞曰：陰山之下地氣良、賢王之昆宗枝強、生我名將護朔方、簡於聖主曜帝鄉、忠謀必[圖]業大昌、讒言罔極黜遐荒、開塋反葬卜云臧、刻石紀德永不忘。

当該墓誌は現在は西安市文物考古研究所に保存されているが、出土状況は明らかではない。この墓誌に関しては、葛承雍「西安出土西突厥三姓葛邏祿熾俟弘福墓誌釋證」という專論がある⁽²⁾。

「熾俟迪墓誌」（天寶十三載）録文⁽³⁾：

[圖]故遊擊將軍右武衛中郎將熾俟公墓誌銘并序

京兆進士米士炎撰

公諱迪、字伏護、陰山人也。發源本於夏后、弈葉聯於魏朝。累生名王、代有屬國。入爲冠族、道遠乎哉。曾祖步失、右驍衛將軍、兼大漠州都督・天山郡開國公。外綰穹廬之長、內參禁箠之任。服勒無歡、授寄方殷。祖力、雲麾將軍・左武衛中郎將、兼本郡太守。奉承世官、分理郡國。出則扞城禦侮、入則捧日戴天。昭考弘福、雲麾將軍・左威衛大將軍、兼知天兵軍副大使・招慰葛祿使。生金星而武、擅玉帳而雄。推轂而寵崇九天、坐帷而謀遠千里。勳績之大、國史存焉。公即大將軍之元子也。歧嶷獨秀、清明在躬。外莊而寬仁、內淑而剛簡。先朝以將門子、萬歲通天中、特受遊擊將軍・左威衛翊府右郎將、從班次也。聖曆載、詔許當下之日、成均讀書。又令博士就宅教示、俾遊貴國庠、從師私第。始談高而成藪、終覆蘆而爲山。以開元中、遷左驍衛中郎。無何、以太夫人之喪去仕。以開元廿五年服缺、換右武衛中郎。効職而玄通周慎、出言而暗合詩書。廊廡識承宮之材、朝廷聞郅都之譽。從龍廣殿、珥鶡太街、有足雄也。雖事經累聖、祿終眉壽而過乏秋毫；愛流冬日、高門納駟、既守儉而安長劍、君亦不威而肅。嗚呼！豈期杖朝雲及而逝者如斯。以天寶十一載四月十七日、寢疾終於京義寧里之私室、時春秋六十有九。公嘗產分疎屬、食待嘉賓。友睦弟兄、惠優孀獨。其養也以色、其喪也以哀。從政不頗、率身有禮。固足冠君子之列、苻古人之志。夫人康氏、琴瑟之友、金玉其相。薨花早凋、槁瘁郊外。即以天寶十三載五月廿五日、祔葬於長安高陽原、禮也。有子鳳、泣血在疚、羸容過戚。嘗議發揮先誌、光啟大人。僕忝昇堂之交、敢違刻石之請。銘曰：

玄冥封域、烏丸苗裔。嚮化稱臣、策名謁帝。糾糾龍驤、副臨節制。昂昂武賁、司羽衛。報國忠公、承家繼世。上天不吊、哲人云亡。合祔元吉、終然允臧。鸞昔孤瘞、劍今雙藏。寘銘翠石、頌德玄堂。古原之上、松柏蒼蒼。

2007年10月下旬、筆者は西安碑林学会に出席した機会を借りて、長安区博物館を参観し、館長の穆曉軍氏の厚意により新発見である熾俟弘福の長子熾俟迪の墓誌を調査する機会を得た。これは哥邏祿首領であり、筆者はかつて新獲トルファン出土文書に記された哥邏祿部落破散問題を

検討した際に長安県博物館で実見した墓誌及び拓本に基づいて、哥邏祿と唐の関係から検討した⁽⁴⁾。現在、この墓誌は既に『長安新出墓誌』に収録されている。2014年には陳瑋氏が「唐長安葛邏祿人熾俟氏家族研究——以熾俟迪墓誌為中心」という論文を発表し、熾俟迪及びその祖父らの出身や入仕問題を中心として、その居地と婚姻と漢化を簡潔に論じた⁽⁵⁾。

1. 誌主（熾俟弘福と熾俟迪）の出身：哥邏祿、葛邏祿（カルルク）

誌主は二人とももとは哥邏祿人である。哥邏祿の初期の歴史については先行研究が多数存在する。主要なものを以下に掲げる。

内田吟風「初期葛邏祿（Karluk）族史の研究」、もと京都大学文学部東洋史研究室内、田村博士退官記念事業会編『田村博士頌寿東洋史論叢』、1968年。のちに『北アジア史研究・鮮卑柔然突厥篇』、京都：同朋舎、1975年、495-509頁。

I. Ecsedy “A Contribution to the History of Karluks in the T’ang Period” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, XXIV. 1-3, 1980 [1981], pp. 23-37.

H. Hoffmann “Die Qarluq in der tibetischen Literatur” *Oriens* 3, 1950, pp. 190-208.

A. - M. Blondeau (ed. & tr.), *Matériaux pour l’étude de l’hippologie et de l’hippiatrie tibétaines (à partir de manuscrits de Touen-houang)*, Genève 1972, pp. 150-152, 322-323 ;

G. Uray “The Old Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 A. D.: A Survey” *Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, ed. J. Harmatta, Budapest 1979, p. 303.

O. Pritsak “Von den Karluk zu den Karachaniden” *Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft* 101, NF XXVI, 1951, pp. 270-300.

張雲「葛邏祿部早期史初探」、『新疆歷史研究』1987年第2期, 14-20頁。

薛宗正「葛邏祿的崛起及其西遷」、『新疆大學學報』1991年第2期, 71-79頁。

哥邏祿は砂漠の北の鉄勒・突厥系に属する部族であり、主な活動地域は金山（現在のアルタイ山脈）にあり、ここは東突厥と西突厥の間に位置する。そのため、時に鉄勒または東突厥に属し、時に西突厥に属することになる。漢文史料中における哥邏祿の初見は『隋書』卷八四、鉄勒伝である。「伊吾の西、焉耆の北、白山の傍」に遊牧する部族には、哥邏祿の薄落（Bulāq）と職乙（Čigil、熾俟）二部があるという⁽⁶⁾。

唐の貞観十三年（639年）頃には哥邏祿は西突厥の麾下に属しており、葉護（ヤブク）阿史那賀魯に統括されており、西州の真北千五百里にあった⁽⁷⁾。その後哥邏祿部族の一部は東に遷徙し、靈州にまで至ったものもあった⁽⁸⁾。哥邏祿部族の大部分はおそらくアルタイ地域に新たに興った突厥車鼻可汗の勢力範囲に入り⁽⁹⁾、北庭の北、金山の西に住んだ。永徽元年（650年）には唐が車鼻部族を撃破し、その余衆の哥邏祿を以て狼山州と渾河州を立て、金山の東側と鬱督軍山（ウテケケン山）一帯に移動し、燕然都護府に隸せしめた⁽¹⁰⁾。

もう一派の哥邏祿部族は、貞觀二十二年（648年）四月に阿史那賀魯に随って南下して唐の庭州へ来投し、天山北麓の庭州一帯に居た⁽¹¹⁾。永徽元年（650年）十二月、阿史那賀魯は唐太宗が死去したことを聞くと、兵を起こして叛し、自ら可汗を号し、西域全域を占有した。處月・處密・姑蘇・歌邏祿・卑失五姓はこれに随って叛した⁽¹²⁾。顯慶二年（657年）十一月、唐朝は阿史那賀魯の乱を徹底的に平定し、天山南北、葱嶺の東西という西域の広大な地区に羈縻州府を設置し、西突厥部族およびその支配下のオアシス王国を安置した。哥邏祿部族は、その原住地——金山西部地区に安置し、「謀落部を以て陰山都督府と爲し、熾俟部を大漠都督府と爲し、踏實力部を玄池都督府と爲し、即ちその酋長を用て都督と爲した」⁽¹³⁾。場所は庭州以北、金山の西のイルティシュ河畔にあたる。

2. 哥邏祿大漠都督府の領袖：部落から唐朝へ

熾俟弘福の曾祖父の娑訶頡利發は、顯慶二年（657年）に大漠州都督府が設置された後、最初の都督になったはずである⁽¹⁴⁾。その名前の「娑訶」（Sābāg）は、『新唐書』卷二一七下、葛邏祿伝の中の「娑訶」の正確な書きかた（6143頁）で、これは哥邏祿熾俟（Čigil）部の別称であろう⁽¹⁵⁾。

弘福の祖父は名を歩失といい、顯慶五年（660年）より後に大漠州都督を世襲したと思われる⁽¹⁶⁾。「熾俟弘福墓誌」は歩失について「統林胡而莫犯、司禁旅而踰肅」と記している。「統林胡而莫犯」とは、歩失が大漠州都督に任じた時、部族を統率して唐朝の辺境を侵犯しなかったことを指し、「司禁旅而踰肅」とは、歩失が京師長安に入った後、禁衛で職責を謹守していたことを指す。これは墓誌に述べられているように、歩失が唐朝から「右驍衛大將軍・天山郡開國公」を授けられた理由である。

折よく新出トルファン文書の中に「唐龍朔二年・三年（662－663年）西州都督府案卷爲安稽哥邏祿部落事」という一組の文書があり、これによって重要な史実が明らかになる。龍朔元年（661年）十月に鐵勒・回紇等の部族は漠北で兵を起こして唐朝に叛し、隣接する金山西麓の哥邏祿歩失達官部族を攻撃したことにより、その部落民衆一千帳が破散し、流浪して庭州附近の處月部の金滿州が管轄する境域に流れ着いた。唐朝政府は燕然都護府に勅を下して西州都督府と相知せしめ、西州から人を派遣して哥邏祿部族を大漠都護府の地へ戻させた。しかし龍朔二年（662年）には鐵勒を討伐する唐朝の将領が無辜の民を濫殺し、そのために初めは勝ったものの後で敗北を喫し、状況は不穏で道も隔たっているため、哥邏祿部族も敢えて大漠へ戻ろうとはしなかった。そののち唐朝が派遣した契苾何力が漠北の鐵勒を安撫して定まった後、哥邏祿部族は龍朔二年（662年）年末になってやっと故地に戻り始めた⁽¹⁷⁾。

歩失は龍朔二年（662年）前後に熾俟部首領であった可能性が高く、そのために大漠州の都督に任命されているのである。このことから歩失達官部落こそまさに大漠州を構成する哥邏祿部族の主体であったことがわかる。弘福の祖父の名は「歩失」であり、これはおそらく熾俟部族の歩失達官部落の名前から来ており、首領が部落の名前を自分の漢名として用いたのであろう。

龍朔二年・三年（662－663年）の文書には、庭州附近に南下した哥邏祿歩失達官部落の首領

の一部が上京した後戻っていないことを記しているが、これも熾俟歩失が先に大漠州部族を経べ、後に入朝して唐朝の禁軍の将領になったことと合致している。

「熾俟弘福墓誌」に父の熾俟力が「本郡太守と爲った」と述べているのは、つまり大漠州都督に任じたことを意味している。「熾俟迪墓誌」にも「祖力、雲麾將軍・左武衛中郎將、兼本郡太守。奉承世官、分理郡國。出則扞城禦侮、入則捧日戴天。」という記載があるのは、彼もまた父親の世代と同じように、京師で禁軍の将領の職に任じつつ、一方ではなお大漠州都督も兼ねていることを述べているようである。熾俟力はおそらく父と共に入朝し、京師に留まったが、しかしなお大漠州都督を兼ねており、これは明らかに唐朝の中央が地方の遊牧部落をコントロールする手段の一つであったことを示している。

「熾俟弘福墓誌」によると、弘福は若い時に軍功が優れており、唐朝の十姓（西突厥）部落の討伐に参加したことがあり、功績により特別に遊撃將軍を授かった。後に河南桃林府長上果毅都尉となり、また左驍衛郎將に除せられた。萬歲登封元年（696年）、雲麾將軍、左威衛將軍、上柱國に進んだという。おおよそ聖曆元年（698年）に、弘福は詔を奉じて天兵行軍副大使兼招慰三姓葛邏祿使に充てられ、西域に出使し、突騎施烏質勒との関係を処理した時に人の讒言を受けたために貶されて蘄州蘄川府折衝となり、なお黎州和集鎮副となった。更に不運だったのは、神龍二年（706年）十二月二十九日に旅中病にたおれ、劍州劍門縣の旅舎で亡くなったことだ。享年は五十三歳であった。「熾俟迪墓誌」にはただ「昭考弘福、雲麾將軍、左威衛大將軍、兼知天兵軍副大使、招慰葛邏祿使」とのみ記すが、これは最高位の職であり、巴蜀へ貶官されたことは諱んで語っていない。この二つの墓誌から見ると、弘福はすでに大漠州都督を兼任しておらず、唐朝境内の武職軍將に任じており、時には地方軍府に仕え、時には命を奉じて出征していた。

「熾俟弘福墓誌」はその諸子が唐朝に仕えていたことを記している。すなわち、「嗣子迪、左驍衛中郎將。次子璟、寧遠將軍・守右領軍衛翊府右郎將・上柱國、賞紫金魚袋。次子溫、長樂縣開國男。次子璡、右威衛果毅都尉、借緋魚袋。次子震、明威府別將等」である。「熾俟迪墓誌」は誌主について次のように記す。「公即大將軍之元子也。岐嶷獨秀、清明在躬。外莊而寬仁、內淑而剛簡。先朝以將門子、萬歲通天中、特受遊撃將軍・左威衛翊府右郎將、從班次也。以開元中、遷左驍衛中郎。無何、以太夫人之喪去仕。以開元廿五年服歛、換右武衛中郎。」これにより、弘福の次の世代には、もう誰も大漠州都督を兼任していなかったことが明らかで、主に京師十六衛の職に任じてそれぞれ地方軍府におり、將門の子として軍事將領になっていたのである。

3. 沙陀・ソグドとの婚姻関係

(1)「熾俟弘福墓誌」には「夫人沙陀氏、封燕郡夫人、從夫之貴也、塞淵其德、淑慎其儀、即以開元廿四年（736年）五月十七日祔葬於長安高陽原、禮也。」という記載がある。

史料の記載では、沙陀は西突厥別部の處月種で、金娑山（ボゴダ山）の南、蒲類海（バルクル＝ノール）の東に居り、大磧があり名を沙陀といったため「沙陀突厥」と号したという⁽¹⁸⁾。『新唐書』卷四三「地理志」には「金滿州都督府。永徽五年（654年）以處月部落置爲州、隸輪臺。龍朔二年（662年）爲府。」という記録がある⁽¹⁹⁾。また、『新唐書』卷二一八、沙陀伝には「又

明年（永徽五年、654年）、廢瑤池都督府、即處月地置金滿・沙陀二州、皆領都督。」と記されている⁽²⁰⁾。庭州輪臺縣とは、一説によれば現在のウルムチ市の南にある烏拉泊古城にあたるという。

『新唐書』沙陀伝の中に、「龍朔初（661年-）、以處月酋沙陀金山從武衛將軍薛仁貴討鐵勒、授墨離軍討擊使。長安二年（702年）、進爲金滿州都督、累封張掖郡公。金山死、子輔國嗣。先天初（712-713年）避吐蕃、徙部北庭、率其下入朝。開元二年（714年）、復領金滿州都督、封其母鼠尼施爲鄯國夫人。輔國累爵永壽郡王。」と記載している⁽²¹⁾。これにより、沙陀金山は突厥鼠尼施部のある女性を妻にした。ほかの史料によって、石見清裕氏が沙陀金山は玄宗初期に卒したと推定している⁽²²⁾。葛承雍氏の計算によれば、弘福は永徽三年（652年）に生まれ、神龍二年（706年）に卒し、享年は五十三歳であった。沙陀に関する史料と照合することによって、弘福の夫人はおそらく沙陀金山と妻の鼠尼施夫人の娘であり、沙陀と西突厥の混血児として、また突厥哥邏祿人に嫁いだであろうことが推定できる。

もう一つの例は過去に出土した「大唐銀青光祿大夫金滿州都督賀蘭軍大使沙陀公故夫人金城縣君阿史那氏墓誌銘」である⁽²³⁾。墓主は西突厥十姓可汗阿史那懷道の長女、開元七年に死亡した。その夫の沙陀公について、石見清裕氏の考証により、沙陀輔國であることが分かる⁽²⁴⁾。沙陀と西突厥鼠尼施夫人の混血の息子は、同じように西突厥可汗の娘と結婚した。これにより、両方の婚姻関係の密切さが見えてくる。

(2)「熾俟迎墓誌」に「夫人康氏、琴瑟之友、金玉其相。即以天寶十三載（754年）五月廿五日、祔葬於長安高陽原、禮也。」と記載している。

熾俟迎の夫人がソグド康氏であることは、哥邏祿熾俟部落はソグド人と婚姻関係があることを証明している。ソグド人はもともと中央アジアのトランスオクシアナ地域に住むイラン系民族であり、シルクロード交易で著名である。彼らは幾多のオアシス国家に分かれており、中でもサマルカンドを中心とする康国が最大で、康氏はおそらくはこのサマルカンドから来たソグド人女性であったと考えられる。ソグド人は交易のほかにも、自らの言語能力をもって北方の遊牧民族の文書係や通訳者として活躍している。我々が目にするのできる初期の西突厥の碑銘は全てソグド語で書かれていたことがその明証である。このため、ソグド人と突厥は長期にわたる交流があり、また多くの婚姻関係も存在していた。安祿山の父親が突厥阿史德氏を妻にしたことは有名である。

沙陀とソグドの関係については、最近新しい史料による証拠が出てきている。上述の新しく整理されたばかりのトルファン新出の哥邏祿歩失達干部落の百姓破散問題の文書にも、ソグド語文書断片「2004TBM 107:3-2」が一件存在する。これはトルファンの巴達木 107 号墓から出土したもので、漢文の「金滿都督府之印」という印が捺されており、沙陀處月部による設置した金滿都督府の印鑑であることがわかる。しかし文章はソグド語で書かれたもので、内容は龍朔三年（663年）に沙陀から西州都督府に送られた書信で、哥邏祿部族の事を処理するためのものであった⁽²⁵⁾。これからわかるように、沙陀金滿都督府の書記はソグド人であり、対外的にはソグド語を使って意思疎通をおこなっていたのであり、ソグド人が沙陀部落の中で果たしていた役割が判明する。

このように、哥邏祿熾俟の家族出身の熾俟迎は、すでに中原に入っていたものの、伝統的に

ソグド人との密接な関係があったために、康氏を娶って妻としていたと容易に理解できるだろう。

4. 居住環境：長安の義寧坊とその周辺

「熾俟弘福墓誌」は彼らの長安における住宅について言及していない。「熾俟迪墓誌」からは、彼が長安の義寧坊に住んでおり、天宝十一載（752年）四月十七日に卒し、年六十九であったことからすると、開耀二年（682年）に生まれたはずである。夫人康氏は天宝十三年（754年）に卒した。その祖先は龍朔三年（663年）に長安に入ったことから、熾俟の家は少なくとも熾俟弘福から熾俟迪、そして康氏が逝去するまで、すべて義寧坊に居住していたと推定できる。

義寧坊は開遠門内にあり、開遠門は唐朝から西方に通じるシルクロードへの起点であり、西方各国の使者や商客たちが長安に入ってくる主要な門戸であった。ここを行き来する胡人は数多く、おそらく義寧坊も胡人を安置する重要な場所であった。我々がおこなった長安坊里の人物の往来に関する研究成果によって、ある坊に住む人は普通、東西南北の近隣諸坊に住む人士と交際していたことがわかっている。そのため我々は熾俟家族の周囲のいくつかの坊に住んでいた突厥・ソグド系胡人の居住状況を考察して、彼らの居住周辺の人文環境を考察してみたい。以下では主に『両京新記』・『長安志』・『唐兩京城坊考』及び『増訂唐兩京城坊考』に依拠して整理した長安坊里に住む人々の邸宅の状況である。関連する人物や祠寺は次のようになっている⁽²⁶⁾。

「義寧坊」

①「十字街東之北、有波斯胡寺。」これは貞観十二年（638年）景教の僧である阿羅本が建てたもの。『唐會要』卷四九、大秦寺の條に、「貞観十二年七月詔曰、波斯僧阿羅本遠將經教、來獻上京、詳其教旨、元妙無為、生成立要、濟物利人、宜行天下。所司即於義寧坊建寺一所、度僧二十一人。」長安にいる景教徒（ネストリウス派）は、初めは主にペルシャ人（波斯人）であった。宗教が伝播する際の法則に照らして考えると、波斯胡寺の周囲には、おそらく景教を信仰するペルシャ人が多数集住していたと考えられる。そのため、義寧坊はおそらく長安にいるペルシャ人が集まる場所だったことは間違いない。ペルシャ人と突厥人も婚姻関係をもっており、中唐期に司天臺に任職したペルシャ人李素は突厥人卑失氏を妻としていたことは、この例である⁽²⁷⁾。

②「冠軍大將軍行右武衛大將軍啜祿夫人鄭氏宅。」啜祿夫人は名は實活、もと涅加部落の鮮卑人、開元十八年（730年）、夫人は息子の涅禮らと死地を脱し、衆をひきいて唐に投降した。夫人に滎陽郡太夫人鄭氏を制授し、息子の涅禮は父の冠軍大將軍、右武衛將軍、左羽林軍を襲いで、特に姓李を賜い、名は佺忠とする。鄭氏は開元二十八年（740年）に京師義寧里の私第に卒す（『續修陝西通志稿』）。啜祿夫人およびその子は契丹人である。

③「銀青光祿大夫檢校工部尚書守右領軍衛上將軍兼御大夫上柱國廬江郡開國公何文哲宅。」何文哲はもとソグディアナの何国王の五代孫で、永徽初（650年-）に遠祖は唐に人質となった。何文哲は中唐の禁衛軍將領となり、徳・順・憲・穆・敬・文宗朝をへて、大和四年（830年）義寧里の私第に薨じ、前後二人の夫人は康氏の姉妹で、奉天定難功臣・試光祿卿普金の娘だった⁽²⁸⁾。

今、我々はまたもや熾俟迪と夫人康氏の史料を得た。これらの史料は長安北西の義寧坊が、胡

人が足跡を残す地であることを説明している。

「義寧坊北為普寧坊」

①「西北隅、祆祠。」祆祠はペルシャ人やソグド人が信奉するゾロアスター教の寺院である。上述の波斯胡寺と同じ理由で、ここの周囲にも必ずやペルシャ人とソグド人が集まっていたはずであるが、発見し得た史料は多くはない。

②「安萬通宅。」「安萬通碑誌銘」によると、「先祖は本と西域安息國に生まる」と記されている。唐朝においては、安息とは普通はソグド安国を指している。安萬通は唐初には五品の官を授けられ、永徽五年（654年）に普寧坊に卒した。安萬通の高祖の安但は魏初に使者として入朝し、位は摩訶薩寶に至っており⁽²⁹⁾、これはすなわち胡人集落の政治と宗務を管理する首領であった。普寧坊には祆祠があることから、安萬通家族は祆教と関係あると考えられる。

「義寧坊南居德坊」

①「西北隅、普集寺。」隋開皇七年（587年）、突厥開府儀同三司鮮于遵義が捨宅して立つ⁽³⁰⁾。

②「南門之西、奉恩寺。」ここはもと于闐國質子、將軍尉遲樂の宅第で、神龍二年（706年）に捨宅して寺を立て、敕して題榜に「奉恩寺」といい、尉遲樂は出家して僧となり、法名を智嚴という⁽³¹⁾。向達の考証に拠ると、この宅はもとは尉遲跋質那・尉遲乙僧父子の居所であり、尉遲樂とは同じ家族であり、隋末から三代が居住していた⁽³²⁾。

③「左驍衛將軍折氏宅。」「曹夫人墓誌」に「夫人曹氏、諱明照、年十有八、適左驍衛將軍折府君為命婦。開元十一年（723年）、終於居德里之私第。」⁽³³⁾とある。折氏は党項の出身であり、夫人の曹氏は、その姓名に光明の意味があることからして、ソグド人かもしれない。これは北方の民族とソグド人が結婚する事例である。

④「阿史那思摩宅。」李思摩は、突厥阿史那氏の出身で、可汗の一族である。曾祖は伊力（利）可汗、祖は達拔可汗、父は咄陸設である。『旧唐書』突厥伝には次のように記す。「思摩者、頡利族人也。始畢、處羅以其貌似胡人、不類突厥、疑非阿史那族類、故歷處羅、頡利世、常為夾畢（伽苾）特勒、終不得典兵為設。」⁽³⁴⁾貞觀四年（630年）に阿史那思摩は捕らえられて唐に入り、後に右武衛大將軍を授けられ、屯營の事を検校し、姓李を賜わった。貞觀二十一年（637年）に李思摩は居德里的第で卒し、昭陵に陪葬された⁽³⁵⁾。

⑤「右金吾衛將軍常山縣開國公史氏夫人契苾氏宅。」契苾氏は初唐の著名な蕃将である契苾何力の娘で、もとは鉄勒の出身である。貞觀六年（632年）に契苾何力は部落を率いて唐に内附し、唐の太宗はかれらを甘・涼二州に安置し、賀蘭州を設置してその衆を綏べた⁽³⁶⁾。後に契苾何力は左領軍將軍に任じられ、臨洮縣主を尚り、鎮軍大將軍・涼國公に封じられた。契苾夫人は開元八年（720年）居德里的私第に終わり、昭陵に陪葬された。その夫史氏は右金吾將軍、常山縣開國公⁽³⁷⁾である。史氏はソグド史国出身の可能性が高い。

⑥「雲麾將軍右龍武軍將軍何德宅。」何徳は唐朝禁軍の將領で、天寶十三載（754年）に金光里私第⁽³⁸⁾に終わった。何徳太夫人は酒泉安氏であることから、彼も中央アジアの何国の出身と推測される。李健超氏の考証では、「長安城に金光里はなく、金光門があるので、金光里は金光門内の居德里か、あるいは群賢里であろう。後考を待つ。」という。

「次南群賢坊」

①「瀚海都督右領軍衛大將軍經略軍使回紇瓊宅。」「回紇瓊墓誌」の記載によると、回紇瓊の曾祖の卑栗は右衛大將軍。祖の支は左衛大將軍。父は右金吾將軍。回紇瓊は回紇可汗の家族の出身で、唐朝に仕え、乾元三年（760年）に群賢里の私第で亡くなった⁽³⁹⁾。

②「石崇俊宅。」「石崇俊墓誌」によると、崇俊は字は孝德、曾祖は奉使として西域より来て、後に籍をおいて張掖郡の人となる。祖の寧芬は、本国の大首領、散將軍。父の思景は、涇州涇陽府左果毅。崇俊は任官せず、貞元十三年（797年）に群賢里の私第で生涯を終えた。夫人は洛陽の羅氏⁽⁴⁰⁾。石崇俊は中央アジアの石国の後裔である。

「次南懷德坊」

①「突厥右賢王、右金吾衛大將軍墨特勤宅。」「賢力毗伽公主阿那氏墓誌」に次のように記す。「三十姓可汗愛女建冊賢力毗伽公主、家壻犯法、身入宮闈、特許歸親兄右賢王墨特勒私第。開元十一年（723年）六月十一日、薨於右賢王京師懷德坊之第。」⁽⁴¹⁾ 墨特勤は突厥の内乱のために唐に降り、右金吾衛大將軍に任じられ、宅を懷德坊に賜わった⁽⁴²⁾。

義寧坊の北東は街を隔てて休祥坊がある。もとは右龍武軍の地であり、大和二年（828年）になって百姓に賜わったため、前期においては胡人が住んだ記録がない。

「次南金城坊」義寧坊と東西の街を隔てて相對する地は、胡人が集住するところである。『大唐新語』卷九に一則の故事がある。「貞觀中（627-649年）、金城坊有人家為胡所劫、司法參軍尹伊請追禁西市胡、俄果獲賊⁽⁴³⁾。」この話は西市に近い金城坊に胡人の多かったことを示している。今のところ、墓誌による記録があるのは、一家族だけである。

「陸（六）胡州大首領定遠將軍安善宅。」安善は字は薩、その先祖は安國大首領、貞觀四年（630年）突厥に随って唐に降り、六胡州大首領に任ぜられ、麟德元年（664年）長安金城坊の私第に卒す。夫人何氏は、何大將軍の長女、金山郡太夫人に封ぜられ、長安四年（704年）惠和坊に卒す⁽⁴⁴⁾。安善夫妻がソグド安國と何国の出身であることは疑いない。

「次南醴泉坊」

①「十字街南之東、舊波斯胡寺。」「儀鳳二年（677年）、（入華）波斯王卑路斯奏請於此置波斯寺。景龍中（707-710年）、（權臣）宗楚客築宅、寺地入其宅、遂移寺於布政坊之西南隅祔祠之西。」ここはもともと流亡してきたペルシャ王のために立てた寺院であったが、その周辺にはつき従って来たペルシャ貴人がいたはずである。

②「烈士臺。」これは安善の子の安金藏の住所である。かつて相王（後の睿宗）の命を守り抜いたため、烈士と呼ばれる。『新唐書』卷一九一、忠義伝に記録がある。

③「公士安令節宅。」安令節は武威姑臧の人。もとは安國の人と思われ、後魏から中華に入り、祖輩は京洛に仕えて、後に幽州宜祿の人となる。安令節は任官しなかったが、その墓誌には「開北阮之居、接南鄰之第。翟門引客、不空文舉之座。孫館延才、還置當時之驛。金鞍玉帖、連騎而不以驕人。晝卯乳犢、陳鼎而未爲矜俗。聲高郡國、名動京師」とみえることから、富裕な商人だったはずである。長安四年（704年）に醴泉里の私第で生涯を終えた⁽⁴⁵⁾。

④「翊府右郎〔將〕同正員上柱國康景雲宅。」『咸寧長安兩縣續志』に載せる康夫人の息子の景雲が書いた墓誌にいう「康夫人乾元元年（758年）終於醴泉坊之私第」。これはソグド人の康氏

である。

⑤「特進右衛大將軍雁門郡開國公俾失十囊宅。」俾失十囊は突厥人である。『冊府元龜』卷九七四「景龍四年（710年）四月辛亥、突厥俾失州大首領伊羅友闕頡斤十囊來降、封其妻阿史那氏為鴈門郡夫人、以向化寵之也。」墓誌の記した唐に降った時期は開元初（712年-）である。「加授右衛大將軍、封雁門郡開國公、錫錦袍鈿帶魚袋二事、物五百段、並賜甲第一區、便留宿衛」。開元二十六年（738年）に禮泉里の私第で亡くなり、年は五十一歳⁽⁴⁶⁾。

⑥「左神策軍散副將遊擊將軍守武衛大將軍米繼芬宅。」米繼芬は、その先祖は西域の米国人で、代々君長であった。その父突騎施は京師に質となり、「歷任輔國大將軍、行左領軍衛大將軍」。繼芬は「承襲質子、身處禁軍、任神策軍將領」、永貞元年（805年）九月に禮泉里の私第に亡くなる。夫人も米氏である。二男子で長子を国進といい、「任右神威軍散將・寧遠將軍・守京兆府崇仁府折衝都尉同正」。次子は僧惠圓、長安大秦寺の景教の神職人員であった⁽⁴⁷⁾。その南方は西市で、胡商が集まるところである。

以上、熾俟家が住んでいた義寧坊を中心として、その周辺の坊里に住んでいた外来胡人の様子や、胡人の信仰の中心であった景教や祆教の祠寺の分布を考察した。熾俟家の住んでいた地は、彼らがよく知っている文化の雰囲気があり、その宗教的な信仰も満たすことができ、それにいつでも昔からの知り合いと会うことができる場所であった。

5. 漢化教育

「熾俟迪墓誌」には、「聖曆載、詔許當下之日、成均讀書。又令博士就宅教示、俾遊貴國庠、從師私第。」と記載がある。唐朝が儒家の教育を用いて漠北の胡人将領を漢化しようとしていることが、ここから明らかに見て取れる。興味深いのは、唐朝が彼らを国学に來させて勉強させるだけでなく、博士を派遣して自ら義寧坊の熾俟迪の邸宅に行かせて補習させているところである。墓誌に言うところの「効職而玄通周慎、出言而暗合詩書」とあることからみると、効果が高かったようである。とはいえ遊牧部族出身の彼らは畢竟武芸に長じているので、相次いで左驍衛中郎、右武衛中郎など、いずれも禁軍の武官に任じられている。

于闐王の尉遲勝の事績を参照してみよう。彼は安史の乱の時に本国の軍隊を率いて中原に赴いて叛乱鎮圧に参加した。しかし叛乱が鎮圧された後も于闐へは戻らず、しかも「京師修行里盛飾林亭、以待賓客、好事者多訪之」⁽⁴⁸⁾という記録が残っている。修行里は長安の街東にあり、地勢が高く水が豊富で、清幽な自然環境は当時の人が住宅を選ぶ時に重視するものであり⁽⁴⁹⁾、于闐王もここに居を定めて再び于闐へ戻ることはなく、長安で安逸な生活を楽しんだのである。

6. 墓誌の書写

「熾俟弘福墓誌」の撰者は「朝散郎行長安縣尉裴士淹」であるという。裴士淹は、絳州聞喜（今の山西聞喜）の人である。南方呉の裴氏に属し、乃ち隋の扶州刺史、臨汾公裴獻の玄孫（『新唐書』・宰相世系表上）であった。郎官となり、司封員外郎および司勳郎中となった（「郎官石柱題名」）。

開元中に給事中に任ぜられ、二十四年（736年）には朝散郎・長安県尉となった。また京兆少尹になって府事を知し、翰林承旨學士・知制誥に充てられた。韋執誼『翰林院故事』に記す唐玄宗時代の翰林學士は、順に呂向・尹愔・劉光謙・張垚・張淑（垚に作るべし）・張漸・竇華・裴士淹である。天宝十一年（752年）五月に京兆尹となる。『旧唐書』玄宗紀には、次のようにある。天宝十四載（755年）三月、「癸未、遣給事中裴士淹等巡撫河南、河北、淮南等道。」『新唐書』李林甫伝には「帝之幸蜀也、給事中裴士淹以辯學得幸。」とあり、後に禮部侍郎となった。至德二・三載（757-758年）。宝應二年（763年）に左散騎常侍、絳郡開國公。永泰二年（766年）に檢校禮部尚書、禮儀使貢舉に知せらるるに任ぜられる。大曆五年（770年）魚朝恩と善かったために連座して、饒州刺史におとしめられる。『金石萃編』卷七九「華岳碑」に裴士淹の題名がある。「禮部尚書裴士淹出為饒州刺史、大曆五年六月六日於此禮謁。」⁽⁵⁰⁾ 顏真卿が記す莫逆の交わりの友人に、河東の裴士淹がいる⁽⁵¹⁾。

『全唐詩』卷一二四に裴士淹作の「白牡丹」が見える。「長安年少惜春殘、爭認慈恩紫牡丹。別有玉盤乘露冷、無人起就月中看」。『酉陽雜俎』の記録では、「開元末、裴士淹爲郎官、奉使幽冀、回至汾州衆香寺、得白牡丹一窠、植於長興私第。當時明公有「裴給事宅看牡丹」詩。」長興坊は朱雀大街の東第二街、北から南に向かう第三坊にあり、義寧坊との距離から見れば、裴士淹は熾俟弘福となんら交際があるようには見えない。このため「弘福墓誌」の書写については、おそらくは裴士淹が当時の長安における著名な文筆家だったため、官府が彼を胡人首領のための墓誌の撰書に指定したのかもしれないし、または故人の家族がツテを頼って依頼したのかもしれない。というのも、弘福の子の熾俟迪は太學で読書しており、その地は長興坊の北一坊を隔てた務本坊にあったため、そのような可能性も排除できない。

裴士淹は、確かに長安に有名な碑誌の撰者である。趙明誠『金石錄』卷八の記録によれば、「第一千五百六十一唐鳳翔「孫志直碑」、裴士淹撰、韓擇木八分書」⁽⁵²⁾。また、『石林燕語』卷四に「余有裴士淹所作「孫志直碑」」⁽⁵³⁾。また大曆六年（771年）には長安に『吳令珪碑』を立て、裴士淹撰、張少悌正書とある⁽⁵⁴⁾。これらの名碑は全て彼の手になったものである。対応する書家も普通の人ではない（訳者注：有名な撰者としての裴士淹に対して、書者の吳郡陸莒も名門の顧、陸、朱、張という吳中四姓に入っている）。そのため、「熾俟弘福墓誌」は唐の官府の命令によって書かれた可能性がもっとも高い。

「熾俟迪墓誌」の撰者は米士炎であり、「京兆進士米士炎」と書いている。その名「米」から判るように、彼はソグド人の後裔ではあるが相当に漢化が進んでおり、そのために籍貫はすでに京兆府長安の人となっており、そのうえ進士を得ていることから、これはもう一人の長安のソグド文化人であると言える。上述の「何德墓誌」もこの「京兆進士米士炎」が書いたものである。時は天宝十三年（754年）である⁽⁵⁵⁾。このように考えれば、第一世代の胡人は官府が選んだ人員が筆を執って書いたが、後の胡人はおそらく自分と親しい胡人文士に自分の家族の墓誌を書いてほしいと願ったのであろう。米士炎が天宝後期以降に自分と種族近い胡人のために墓誌を書くことは、恐らく自然なことだったのであろう。

このように見てくると、異なる地点に住む胡人の間には、なお密接な関係がある。彼らは婚姻

や喪葬の面で、同じ集団の違う人物と結びついているのである。筆者はこれまでにソグド人とその集落の状況に注目していたが、今後はさらに視野を広げ、長安のソグド人やほかの族群との関係を検討し、異なる所に住んでいる各種の胡人間の関係を考えていきたい。

註

- (1) 図版は『隋唐五代墓誌匯編』陝西卷第3冊、天津：天津古籍出版社、1991年、161頁を参照。録文は吳鋼主編『全唐文補遺』第2冊、西安：三秦出版社、1995年、22頁；周紹良・趙超主編『唐代墓誌匯編續集』開元144、上海：上海古籍出版社、2001年、551-552頁に見える。
- (2) 論文は榮新江・李孝聰主編『中外關係史：新史料與新問題』、北京：科學出版社、2004年、449-456頁に掲載され、葛承雍『唐韻胡音與外來文明』、北京：中華書局、2006年、130-139頁に収録された。
- (3) 西安市長安博物館編『長安新出墓誌』、北京：文物出版社、2011年、188-189頁。
- (4) 榮新江「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題」（沈衛榮主編『西域歷史語言研究集刊』第1輯、北京、科學出版社、2007年）、12-44頁。榮新江撰、西村陽子訳「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」（『内陸アジア言語の研究』XXIII（森安孝夫教授還暦記念特集号）、2008年）、59-77頁。
- (5) 陝西師範大學主催「長安學與古代都城國際學術研討會」（西安、2014年11月24-27日）に提出した論文であり、未発表。
- (6) 『隋書』卷八四、北京：中華書局、1973年、1879頁。そのうちの断句は「薄落職・乙咥・蘇婆・那曷」の誤りである。
- (7) 『舊唐書』卷一九四下「突厥傳」下、北京：中華書局、1975年、5186頁。
- (8) 『宋本冊府元龜』卷六五六「奉使部」立功條、北京：中華書局、1989年、2210頁。『冊府元龜』卷六五六、北京：中華書局、1960年、7858頁。
- (9) 『舊唐書』卷一九四上、突厥傳、5165頁。『唐會要』卷一〇〇、葛邏祿國、上海古籍出版社、1991年、2123-2124頁。
- (10) 『唐會要』卷七三、安北都護府、1558頁。譚其驤主編『中國歷史地圖集』第5冊、北京：中國地圖出版社、1982年、「關內道北部」、42-43頁を参照。
- (11) 『唐會要』卷九四、2007-2008頁を参照。
- (12) 『新唐書』卷一一〇、契苾何力傳、北京：中華書局、1975年、4119頁。
- (13) 『新唐書』卷二一七下、葛邏祿傳、6143頁。
- (14) 葛承雍「西安出土西突厥三姓葛邏祿熾俟弘福墓誌釋證」、『中外關係史：新史料與新問題』、452-453頁。
- (15) ベリオは「婆匭」の正確な書法は「娑匭」であるべきことについて夙に指摘しているが、「熾俟弘福墓誌」の出現によってその論証が正しかったことが証明された。P. Pelliot, “Neuf notes sur des questions d’Asie centrale”, *T’oung Pao*, XXVI, 1929, p. 243.
- (16) 葛承雍「西安出土西突厥三姓葛邏祿熾俟弘福墓誌釋證」、『中外關係史：新史料與新問題』、452頁。
- (17) 榮新江「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏祿部落破散問題」、12-44頁。榮新江撰・西村陽子訳「新出吐魯番文書に見える唐龍朔年間の哥邏祿部落破散問題」、59-77頁。
- (18) 『新唐書』卷二一八、沙陀傳、6153頁。
- (19) 『新唐書』卷四三、地理志、1131頁。
- (20) 『新唐書』卷二一八、沙陀傳、6154頁。
- (21) 『新唐書』卷二一八、沙陀傳、6154頁。

- (22) 石見清裕「唐代『沙陀公夫人阿史那氏墓誌』譯注・考察」、『村山吉廣教授古稀記念中國古典文學論集』、東京：汲古書院、2000年、376-377頁。
- (23) 圖版は『隋唐五代墓誌彙編・北京卷』第1冊、138頁を参照、録文は周紹良主編『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、1992年）、1223-1224頁を参照。
- (24) 石見清裕「唐代『沙陀公夫人阿史那氏墓誌』訳注・考察」、376-381頁。
- (25) この文書についての簡略な紹介としては榮新江「新出トゥルファン文書に見えるソグドと突厥」、『環東アジア研究センター年報』第1号、新潟大学、2006年3月、11頁を参照。詳細な研究は Yutaka Yoshida, “Sogdian Fragments Discovered from the Graveyard of Badamu”, 『西域歴史語言研究所集刊』第1輯、45-53頁に見える。
- (26) 関係する史料は以下の著作に見える。ここでは一々注記しない。辛德勇『兩京新記輯校』、西安：三秦出版社、2006年；『長安志・長安志圖』、辛德勇・郎潔校、西安：三秦出版社、2013年；徐松撰、李健超增訂『增訂唐兩京城坊考』（修訂版）、西安：三秦出版社、2006年。
- (27) 榮新江「一個入仕唐朝的波斯景教家族」、葉奕良主編『伊朗學在中國論文集』第2集、北京：北京大學出版社、1998年、82-90頁。
- (28) 『全唐文補遺』第1輯、西安：三秦出版社、1994年、282-286頁。何文哲についての詳しい討論は、下の論文を参照：魏光「何文哲墓誌考略」、『西北史地』1984年第3期、盧兆蔭「何文哲墓誌考釋——兼談隋唐時期在中國的中亞何國人」、『考古』1986年第9期、841-848頁、李鴻賓「論唐代宮廷內外的胡人侍衛——從何文哲墓誌銘談起」、『中央民族大學學報』1996年第6期、39-44頁。
- (29) 『全唐文補遺』第2輯、西安：三秦出版社、1995年、129-130頁。
- (30) 突厥人の仏教信奉に関する問題については蔡鴻生「突厥奉佛史事辨析」（同氏『唐代九姓胡與突厥文化』、北京：中華書局、1998年、144-164頁）を参照。
- (31) 贊寧『宋高僧傳』卷三「唐京師奉恩寺智嚴傳」、范祥雍點校、北京：中華書局、1987年、41-42頁。
- (32) 向達『唐代長安與西域文明』、北京：三聯書店、1957年、8-9頁。
- (33) 周紹良主編『唐代墓誌匯編』、上海：上海古籍出版社、1992年、1284頁。
- (34) 『舊唐書』卷一九四上「突厥傳」、5163頁。
- (35) 「李思摩墓誌」、『全唐文補遺』第3輯、西安：三秦出版社、1996年、338-339頁。下の論文を参照：岳紹輝「唐“李思摩墓誌”考釋」、『碑林集刊』三、西安：陝西人民美術出版社、1995年、51-59頁；鈴木宏節「突厥阿史那思摩系譜考——突厥第一可汗國的可汗系譜と唐代オルドスの突厥集團」、『東洋學報』卷87 1号、2005年、37-68頁；艾沖「唐太宗朝突厥族官員阿史那思摩生平初探——以〈李思摩墓誌銘〉為中心」、『陝西師範大學繼續教育學報』2007年第2期、59-63頁；尤李「阿史那思摩家族考辨」、達力扎布主編『中國邊疆民族研究』第4輯、北京：中央民族大學出版社、2011年、13-34頁。
- (36) 『舊唐書』卷一〇九「契苾何力傳」、『新唐書』卷一一〇「契苾何力傳」。
- (37) 『全唐文補遺』第2輯、442頁。
- (38) 「何德墓誌」、『全唐文補遺』第3輯、97-98頁。
- (39) 『全唐文補遺』第7輯、西安：三秦出版社、2000年、58頁。
- (40) 『全唐文補遺』第4輯、西安：三秦出版社、1997年、472頁。
- (41) 『唐代墓誌匯編』、1280頁。
- (42) 『新唐書・突厥傳』、『冊府元龜』卷九八六。
- (43) 劉肅撰・許德楠・李鼎霞點校『大唐新語』卷九、北京：中華書局、1986年、138頁。
- (44) 『全唐文補遺』第4輯、402-403頁。
- (45) 『全唐文補遺』第3輯、36-37頁。榮新江「安令節墓誌解說」を参照、榮新江、張志清主編『從撒瑪

爾干到長安——粟特人在中國的文化遺跡』、北京：北京圖書館出版社、2004 年、137 頁。

- (46) 『全唐文補遺』第 5 輯、西安：三秦出版社、1998 年、368-369 頁。
- (47) 『全唐文補遺』第 3 輯、143 頁。
- (48) 『舊唐書』卷一四四「尉遲勝傳」。
- (49) 曹爾琴「唐長安住宅分佈」、史念海主編『漢唐長安與關中平原』、(『中國歷史地理論叢』(增刊)) 1999 年。
- (50) 郁賢皓「『全唐詩』作者小傳補正(續)」、『南京師大學報』1991 年第 1 期、15-16 頁。
- (51) 顏真卿「正議大夫行國子司業上柱國金鄉縣開國男顏府君神道碑銘」、『顏魯公文集』卷八、清三長物齋叢書本。
- (52) 趙明誠著・金文明校證『金石錄校證』、桂林：廣西師範大學出版社、2005 年、148 頁。
- (53) 葉夢得『石林燕語』卷四、北京：中華書局、1984 年、55 頁。
- (54) 陳思『寶刻叢編』卷七、文淵閣四庫全書本。
- (55) 『全唐文補遺』第 3 輯、97-98 頁。ここの訳文は作者の名前を「米吉炎」としているが、元の墓誌石を詳しく検討すれば、「吉」ではなく、「米士炎」となる。